アンリ・ラブルーストの青年期と師匠たち
―18世紀の革新性の継承―

Henri Labrouste's youth and his masters of architecture :
An inheritance from the innovativeness of the eighteenth-century

白鳥洋子
Yoko Shiratori

序

ピエール=フランソワ=アンリ・ラブルースト（Pierre-François-Henri Labrouste, 1801年5月11日パリ生まれ、1875年6月24日フォンテーヌブローにて死去）は、サント=ジュヌヴィエーヴ図書館（Bibliothèque Sainte-Geneviève, 1838-50）、パリ国立図書館（Bibliothèque nationale, 1854-75）の2作品で知られる。両図書館では記念碑的な公共建築に鉄構造が露出にて使用され、古典主義の建築に近代の新しい技術が導入された早期の事例としてその意義が認められる。近代建築史においては鉄構造の新たな展開へ貢献したという技術的な観点から彼の革新性を認める見解が一般的である。また、西洋建築史において、ラブルーストは19世紀フランスの建築の系譜における厳格な古典主義に対して合理主義を追求し、幅広い表現を許容するロマン主義を確立したとされる。狭義の古典主義からの転換に貢献し、その後の新たな潮流を築いた建築家として解釈される。本稿では主にラブルーストの青年期に着目し、彼の家系や彼が在籍したコレージュ・サント=バルブ（Collège Sainte-Barbe）、エコール・デ・ボザール（École des Beaux-Arts）にて師事した建築家、アントワーヌ=ローラン=トマ・ヴォードワイエ（Antoine-Laurent-Thomas Vaudoyer, 1756-1846）、ルイ=イポリート・ルバ（Louis-Hippolyte Lebas、1782-1867）について考察し、古典的な背景を基礎とするラブルーストがいかにして革新性や転換を導き出したかについてその一端を明らかにすることを目的とする。

アンリ・ラブルーストに関する同時代の文献としては1870年代後半の、アントワーヌ=ニコラ・バイィの『アンリ・ラブルースト氏に関する覚え書き』、アンリ・ドラボルドの『アンリ・ラブルースト氏の生涯と作品に関する覚え書き』、ウジェーヌ・ミレの『アンリ・ラブルースト、彼の生涯と作品』が挙げられ、これらはラブルーストの死去の際に追悼の意を表して出版されたものである。加えて『アンリ・ラブルーストの回想録』が挙げられ、これも同時代の人々の文章を収集したものである[1]。また、アンリ・ラブルーストに関する主な先行研究としては、1970年代から80年代にかけて出版されたピエール・サディのモノグラフィ、ニール・レヴィーンの論文が挙げられ、また、ロマン主義の文脈におけるラブルーストに関する文献としてデイヴィット・ヴァン・ザンテンの著作が挙げられる[2]。さらに近年の研究としてはレンツォ・ドゥッビーニ編の『アンリ・ラブルースト、1801-1875』、ジャン=ミッシェル・ルニオー編の『本の宮殿、ラブルースト、サント=ジュヌヴィエーヴおよび諸図書館』が挙げられる[3]。本稿では主にこれらの文献も参考にしながら論考を進めることとする。

第1章　青年期のラブルースト

1. 家系

ラブルースト家はボルドー出身の家系であり、プルメナール（Premeynard）に所有地と小作地を持ち、当初はラ・ブルースト（La Brouste）と称した。16世紀、または17世紀頃からラブルースト家はボルドーに所有地を持ち、1705年には海軍の王立仲買人であるピエール・ド・ラ・ブルースト（Pierre de La Brouste）が当地に居を構えた。領地には家の名であるラブルーストが与えられた[4]。ラブルースト家の出身地であるジロンド県は、フランス革命当時の商工業ブルジョワの穏健な共和派の政治団体であるジロンド派を形成したことで知られる。ジロンド派はジャコバン派との対立の後に1793年に敗退し、同年に設置された革命裁判所によりその指導者の多くは即決裁判により粛清された。ラブルーストの父、フランソワ=アレクサンドル・ラブルースト（François-Alexandre Labrouste, 1761または1762-1835または1836[5]）はジロンド県の行政官を経て、総裁政府時代には五百人会（革命暦3年の憲法により定められた下院、1795-99）の議員を務める。執政政府期、第一帝政下においては護民院（下院、執政政府憲法による立法機関、1800-07）の議員を務め、王政復古期には預金供託局局長の任にあった。フランス革命後の国家制度の整備に貢献し、ナポレオン1世による最初の受勲者としてレジオン・ドヌール勲章を受勲する[6]。1835年に彼はコルシカ出身の無政府主義者、ジュゼッペ・フィエスキ（Guiseppe Fieschi, 1790-1836）によるテロ行為の犠牲となる。ジュゼッペ・フィエスキは七月王政に対するテロ行為を扇動し、1835年にバスティーユで開催された七月革命の記念祝典の際に時限爆弾を爆発させた。祝典には国王ルイ=フィリップと随行者が参列していたが、王族に被害は無かった。しかし、モルティエ（Mortier）元帥などの要人を含む18人の犠牲者を出し、フランソワ=アレクサンドル・ラブルーストもその犠牲者の一人となった。この時、アンリ・ラブルーストは34才であった。翌年の1836年にフィエスキと共謀者は斬首刑に処せられた。

アンリには1人の姉妹と4人の兄弟があり、アンリは四男である。長男、エチエンヌ(Étienne)はパリの徴税員(receveur des contributions)であり、次男、アレクサンドル(Alexandre, 1796-1866)は弁護士になり、後に代訴士会議所の所長となるアンドリュー(Andrieux)氏の娘婿になる。その後、彼は兄弟が過ごしたコレージュ・サント=バルブの学院長の職に就き、レジオン・ドヌール勲章を受勲した[7]。2才年上の兄、三男、テオドール(Théodore, 1799-1885)はアンリと共に建築を学び、後に建築家として活躍した。彼も父フランソワ=アレクサンドル、次兄アレクサンドル、弟アンリと同様にレジオン・ドヌール勲章を受勲した。アンリとテオドールは同時期にエコール・デ・ボザールで建築を学び、両者ともアントワーヌ・ヴォードワイエに師事した。アンリは1824年に、テオドールは1827年にローマ大賞を受賞し、ローマのフランス・アカデミーの奨学生として同時期にローマに留学し、相互に協力しながら留学生活を送った。テオドールはローマでの留学においてアンリと同様に古代を主題とした復元研究を行い、ロマン主義の興隆の一端を担う。その後、1850年代から60年代にかけて病院の建築家として活躍し、フェルナン=ヴィダル病院(Hôpital Fernand-Widal, 1853-85)、廃疾者のホスピス(Hospice des incurables, 1864-1869)を設計した。その他には、アルスナル図書館(Bibliothèque de l'Arsenal, 1856-1870)の建築家の任命を受け、同図書館の増築改修を手掛けた。

2. コレージュ・サント=バルブの概要

ラブルーストは8才でコレージュ・サント=バルブ[8]に入学した。他の3人の兄も同コレージュで学び、アンリも含めラブルースト兄弟達は優秀であったとされる。彼と兄弟達が過ごしたコレージュ・サント=バルブは、パリで最も歴史のあるコレージュの一つであり、1430年に法学博士ジャン・ユベール(Jean Hubert)により設立された。旧来はランス(Reims)通りとサン=サンフォリアン(de Saint-Symphorien)通りの間に位置していた。その後、1844年に行われたコレージュの拡張によりジャン・ユベール通りは撤去され、新しくパンテオン広場に入り口を持ち、新サント=ジュヌヴィエーヴ図書館に隣接するようになる[9]。ラブルーストは1819年のボザール入学までおよそ10年間、このパンテオン広場周辺で過ごす。加えて、後に兄テオドールと共同で行ったコレージュ・サント=バルブの新校舎の設計と、サント=ジュヌヴィエーヴ図書館の設計により、彼は生涯に渉りパンテオン広場周辺と関わりを持つこととなる。先に述べたように両者の次兄、アレクサンドルは1838年から同コレージュの学院長となり、テオドールとアンリは同コレージュの新校舎(1840-41)の設計を共同で行った[10]。

このコレージュではアンリ・ラブルースト、テオドール・ラブルーストに加え、レオン・ヴォードワイエ(Léon Vaudoyer, 1803-1872)が同時期に学び[11]、19世紀のロマン主義の中核を成す建築家達を輩出したことでも注目される。レオン・ヴォードワイエは国立工芸学院(Conservatoire national des arts et métiers, 1836-1872)、マルセイユの大聖堂、サント=マリー=マジュール(Sainte-Marie-Majeure, 1852-93)の建築家として知られる。後にラブルースト兄弟とレオン・ヴォードワイエが師事するアトリエの主催者アントワーヌ・ヴォードワイエは、レオン・ヴォードワイエの父である。ラブルースト兄弟とレオン・ヴォードワイエは、後にボザールでも同時期に学び、各々、ローマ大賞を受賞してローマ留学を果たす。彼らはローマ留学中にも親交を深め、生涯に渉り友人関係を継続して、フェリックス=ジャック・デュバン(Félix-Jacques Duban, 1797-1870)と共に新しい流派であるロマン主義を築く中心的な建築家として活躍することとなる。

コレージュ・サント=バルブの卒業生には、ギュスターヴ・エッフェル(Gustave Eiffel, 1832-1923)をはじめ、ミッシェル・アダンソン(Michel Adanson, 1727-1806、博物学者)、アルセーヌ・ダルソンヴァル(Arsène d'Arsonval, 1851-1940、物理学者)、アルフレッド・ドレフュス(Alfred Dreyfus, 1859-1935 、陸軍中佐、ドレフュス事件の当事者)、ジャン・ジョレス(Jean Jaurès, 1859-1914、社会主義者)、シャルル・ペギー(Charles Péguy, 1873-1914、思想家)、クロード・ルルーシュ(Claude Lelouch, 1937-、映画監督)などがいる。教授ではジュール・ミシュレ(Jules Michelet, 1798-1874、歴史家)などの博識の人々が教鞭を執り、同コレージュは特権的な啓蒙の恩恵を受けた。主に「工学技術」、「自然科学」、「社会思想」、「芸術」の分野において優れた活躍をした人物が見られ、特に19世紀後半から20世紀初頭にかけてそれらの分野で主導的役割を果たした人物を多く輩出した。

ラブルースト兄弟の設計したサント=バルブの校舎は1881年に取り壊され、現在残っている建物は後にラブルーストの弟子、ルイ=エルネスト・ルルー(Louis-Ernest Lheureux, 1827-1898)が設計した新校舎(1880-1884)である[12]。この校舎は1998年に閉鎖され、改築工事の後に2009年にパリ大学付属図書館として新たに開館している。

3. コレージュ・サント=バルブの復興期

コレージュ・サント=バルブの起源は中世に遡り、パリ大学図書館への移行に伴う1998年の閉鎖まで、独立した組織として同じ場所にあり続けた中世の大学を起源とする唯一の教育機関であり、これは特殊な事例である。1793年以降、修道院に属するパリの大学とコレージュは革命の過程の中で閉鎖され、それらの土地建物、書籍などの財産はやがて国家資産として接収される。しか

図1　コレージュ・サント=バルブ、1891年頃

しながら、同コレージュは1797年にプリタネ・フランセ（Prytanée français）[13]の副院長に就任したヴィクトール・ド・ランノー（Victor de Lanneau, 1758-1830）[14]の尽力によりその接収から逃れた。1798年に彼は個人として同コレージュの建物を借り受け、翌年にそれを新たに「科学と芸術のコレージュ（Collège des Sciences et des Arts）」として再開校した[15]。ラブルーストの入学した1809年頃のコレージュ・サント=バルブは革命の混乱からの復興期にあり、この復興はランノーの主導力に負っている。彼の革命期特有の特殊な経歴はしばしば注目される。サント=バルブの多くの人々と同様にフリーメーソンと関係を持ち、プリタネの副院長の地位を得たとされる。コレージュ・サント=バルブ出身者はしばしばフリーメーソンと関係を持つことが知られている。

彼は1792年に国民議会に提出した「コレージュを構成する個人の自由と独立を宣言し、修道院の抑圧から解放することを求める」請願を理念とし、サント=バルブに特別な役割を与える意図の下に同コレージュの入手と再開校を行った。これにより同コレージュは修道院のみならず、国家による公教育からも自由と独立を有することとなった。同コレージュは秩序と家庭的な精神を持ち、生徒の自由に寛容で、奨学制度を持つなど、以前のサント=バルブの運営方法を継承し、啓蒙の精神と自由を重んじる中等教育機関となる。ランノーは1830年の死去までこのコレージュを統率した。ラブルーストは復興期のコレージュ・サント=バルブに入学し、独立性を有する啓蒙的自由主義の教育環境の中で多くの時間を過ごしたのである。

4. 科学と芸術のコレージュ

前述のようにランノーの改革の下に1798年に再開されたこのコレージュは当初「科学と芸術のコレージュ」と命名され、数年後に彼により元来の名称「コレージュ・サント=バルブ」に戻される。数年間しか使用されなかった「科学と芸術のコレージュ」の名称には、後にラブルーストが表明した建築思想との根源的な共通性が認められる。後にラブルーストは建築アカデミーに対抗する機関として中央建築家協会（Société centrale des architectes）の活動に尽力し、会長を務めるが、この協会の会員メダルは彼による意匠である。ここでは「科学と芸術」、「正確性と自由」が象徴され、彼が生涯貫いた建築思想が表明されている。その思想をより明確に示しているメダルの裏面には「コンパスと花」が刻印され、「コンパス」は「科学」と「正確性」を象徴し、「花」は「芸術」と「自由」を象徴している。これは、同時代の人々や後の研究者により、ラブルーストの建築思想の表明としてしばしば引用される。表面には「様々な時代の建造物の冠を戴いた女神の横顔」が彫像され、この図像に関してラブルーストは「全ての時代の建造物が彼女の頭部に戴かれ、それらが彼女の頭脳から湧き出るようであることを意図した」[16]と言及している。その女神の左側にも「コンパス」が彫像され、この面の図像においても「女神から生まれる様々な時代の建築物」が「芸術」と「自由」を、そして、「コンパス」が「科学」と「正確性」を象徴している。両面とも「科学と芸術」、「正確性と自由」が主題であり、その意志表明は明白であると同時に堅固である。図像として採用されたコンパスは主要な建築の道具の一つであると同時に、フリーメーソンの象徴として頻繁に使用されたことも指摘しておきたい。

図2　ラブルースト、中央建築家協会会員メダル
左：表面「様々な建造物を戴いた女神とコンパス」
右：裏面「花とコンパス」

芸術教育に関しては、コレージュ・サント=バルブでは人物モデルによるデッサンなどの専門性の高い授業が行われ、ラブルーストのコレージュ時代のデッサンとして、「トルコ人の肖像（Tête de Turc）」が残されている。これはコレージュ最後の年に描かれた実物モデルによる人物デッサンであり、ラブルーストが最優秀賞を受賞した記録が残されている[17]。ルイ=エルネスト・ルルーの設計による新校舎では、華麗なデッサン室と、物理と化学の為の階段教室が設けられ[18]、芸術と科学に重きをおいていた教育思想がこ

こからも窺える。加えて、このコレージュの特徴の一つとしてギリシア語講座の開講が挙げられる。旧来の教育ではラテン語を第一の古典語とし、ギリシア語は副次的に扱われる傾向があるとされていた。同コレージュではヘレニズム期を中心とするギリシア世界は「良き趣味の最も純粋な源泉と知識の鍵」とされ、「科学と芸術に対する見識の高い主題を育む」とされた。これらの文言の背後には、ギリシア世界の高貴な理性と啓蒙主義を背景とする、同コレージュの教育理念の特性を理解することができる。更にこのコレージュでは「フランス人は共和主義の人々の古典語を学ばずに済ますことはできない」とされ、古代の共和主義の理想を理解することに重きが置かれた[19]。古代ローマでは知識人の多くがギリシア出身であり、常にギリシア語とラテン語の2言語が併用され続けたことを考慮すると、古代を理解する為にはラテン語に加えてギリシア語の深い見識が必要である。コレージュ・サント=バルブではギリシア語講座は全ての学生に開かれていたわけではなく、優れたラテン語を修得したと認められた者のみがギリシア語を学ぶことを許可された。ラブルーストは「完璧な古典語を修得」していたとされるが、これはおそらくラテン語とギリシア語の両言語の高度な修得を示していると思われる。彼の優れた古典語の能力が後のローマ留学中の調査研究では文献や碑文を解読する際に発揮され、その研究成果の専門性を高めることとなる。

5. ラブルーストの素養と風刺画のデッサン

同コレージュ在学中のラブルーストについては「繊細な性格であり、強いというよりは神経質であり、熱心で思慮が深く強い意欲に恵まれた勤勉家であり」、「完璧な古典語を修得し」、また「彼の適性は数学へと向かう。簡単に理解してしまうので、彼にとって数学の問題は楽しみであった。しかしながら、彼が有していたデッサンへの趣向を考慮すると、後に彼が芸術の人生を選び、情熱を持ってそれを愛したことに我々は驚かない」と記され、後のラブルーストの建築の特徴である「科学と芸術」の双方に対する秀逸な素養は若きコレージュ時代から既に現れていたと捉えることができる。「背丈は中位であり、外見よりも持久力があった。大変感受性が強く、彼の性格には何か冷静で慎重なところもあったが、冷淡な人ではなかった。彼は全く真面目な性格であったが、朗らかさを欠いてはいなかった。彼は繊細な心配りを持つ世話好きな人であり、特に正義や倫理に対して的確な感覚を持っていた」[20]と記されてもいる。ラブルーストの正確なデッサンから窺える几帳面な性格や、パエストゥム神殿の復元研究に見られる事実に対する確固たる追求心、両図書館の設計に見られる執念とも言える情熱はこれらの記述と一致している。ラブルーストのボザール進学の経緯については、「長いこと建築へと導かれる傾向を感じていたが、既に兄のテオドールが建築の道に進み、アントワーヌ・ヴォードワイエのアトリエに受け入れられていた。兄に対する慎みから彼は建築への希望を公言し難く、テオドール自身がアンリを師匠に紹介することを提案する必要があった」[21]と記され、慎み深い一面を窺い見ることができる。

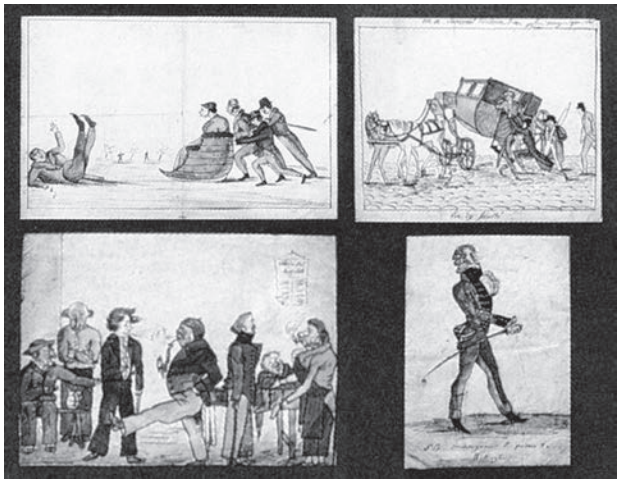


図3　ラブルースト、コレージュ時代の諷刺画、1813-1816年

コレージュ・サント=バルブ時代のラブルーストのデッサンには、「氷上の遊び（Jeux sur glace）」、「四輪馬車のアクシデント（Accidents de calèche, 1814）」、「居酒屋の情景（Scène de taverne, 1816）」、「ウェリントン大公閣下（S. Ex. Monseigneur le prince de Wellington）」、「軽やかな足取りのアキレス（Achille aux peids légers, 1813）」などが残され[22]、これらは1813年から1816年にかけて彼が12才から15才の頃に描かれたものである。最初の3作品では当時のパリに住む人々の日常生活が描かれ、「ウェリントン大公閣下」では、王政復古初期にフランス駐在イギリス大使となり、再挙のナポレオンを1815年のワーテルローの戦いにて撃破した大公の得意気な様子が戯画的に描かれている。社会諷刺やパリの日常生活の題材からは大人びた観察や着想が見られ、描き慣れた手法からはデッサンへの優れた素養が窺われ、前述の資質と一致する。

第2章　アントワーヌ・ヴォードワイエ

1. ヴォードワイエと「革命期の建築」

ラブルーストはコレージュ・サント=バルブを卒業の後、アントワーヌ・ヴォードワイエ[23]とルイ=イポリート・ルバのアトリエ内の教室にて予備的な訓練を受け[24]、その教室の修了の後に、1819年に開校されたばかりのエコール・デ・ボザール[25]に18才で入学する。

ボザールへの入学後もラブルーストは両者に師事し、「ヴォードワイエとルバのアトリエ」と呼ばれる彼らのアトリエで学ぶ。二人は共同で一つのアトリエを運営し、両者の年齢差は26才であり、ヴォードワイエはルバの師でもあった。彼らのアトリエにはペルシエ、フォンテーヌのアトリエと同様に多くの学生が在籍し、ローマ大賞受賞者を多数輩出した。1820年代には、ヴォードワイエとルバのアトリエからは、アンリ・ラブルースト(1824年)、レオン・ヴォードワイエ(1826年)、テオドール・ラブルースト(1827年)とローマ大賞受賞が続いた。アントワーヌ・ヴォードワイエは、シャルル・ペルシエ(Charles Percier、1764-1838)、ピエール=フランソワ=レオナール・フォンテーヌ(Pierre-François-Léonard Fontaine、1762-1853)と同時代に活躍した建築家であり、クロード=ニコラ・ルドゥー(Claude-Nicolas Ledoux, 1736-1792)、エチエンヌ=ルイ・ブーレ(Étienne-Louis Boullée、1728-1799)に代表されるフランス18世紀後半の「理性の時代の建築」の流れを汲む革新の精神と幻想性とを建築に求めた「革命期の建築家」の一人として知られる[26]。

アントワーヌ・ヴォードワイエは、1778年に22歳にてアカデミー付属の建築学校に入学し、アントワーヌ=フランソワ・ペール(Antoine-François Peyre, 1739-1823)に師事した。ペルシエ、フォンテーヌもペールに師事し、彼らはアトリエ時代からの友人であり、生涯に渉り友好を結ぶ。ヴォードワイエは学生時代からアレクサンドル=イポリート・ルバ(Alexandre-Hippolyte Lebas)のサロンに参加した。アレクサンドルはヴォードワイエの生涯の相談者であり理解者であり、同時に義兄弟であった。アレクサンドルの息子がルイ=イポリート・ルバであり、したがって彼はヴォードワイエの甥にあたる。アレクサンドルは検事(procureur)であり、彼のサロンは若い芸術家や建築家の集まりの場であった。建築家ではギー=ルイ・コンブ(Guy-Louis Combes, 1757-1818、ローマ大賞、1781)、ピエール・ベルナール(Pierre Bernard, 1761-1793、ローマ大賞、1782)、シャルル・ペルシエ、ピエール=ジュール=ニコラ・ドレスピン(Pierre-Jules-Nicolas Delespine, 1756-1825)、ルイ=エチエンヌ・デゼーヌ(Louis-Étienne Deseine、ローマ大賞、1777)、エルティエ(J.-F. Hertier)、レオン・デュフルニー(Léon Dufourny,1754-1818)などの後に活躍する人物が参加していた。同時にこのサロンはフリーメーソンのロージュの役割も果たしていた。ヴォードワイエはフリーメーソンであることが知られ、1782年にそのロージュの一つであるラルモニー(L'Harmonie)会に入会している[27]。彼は1783年に「君主の城館の庭園内に設けられる動物園(Une ménagerie renfermée dans le parc du château d'un souverain)」にてローマ大賞を受賞した。この受賞案は後述するフォンテーヌのローマ大賞入賞案と同様の、18世紀の革命期の建築の傾向を示している[28]。1784年から1788年にかけてローマのフランス・アカデミーの奨学生として留学し、1785年にマルケルス劇場(Théâtre de Marcellus)の調査研究を行った。ここでは野心的な主題である原ドリス式オーダーの再発見を公にし、ギリシアのドリス式オーダーがローマへ伝播したことの証明とした。後にラブルーストはボザール時代にこのマルケルス劇場のオーダーに関するデッサンを残し、加えて彼はローマ留学3年目の1827年の研究課題をこのマルケルス劇場としており、彼の原ドリス式への探究心はヴォードワイエから継承したことが理解できる。なお、テオドールもローマ留学中にマルケルス劇場の研究を行っている[29]。

図4 ヴォードワイエ、マルケルス劇場の測量、1785年頃

ヴォードワイエはローマ留学中に、革命期の建築の流れを汲む幾つかの小規模の設計案を制作している。一つは著名な「メゾン・ダン・コスモポリート(Maison d'un cosmopolite, 1783-1784または1785)」であり、詳細は後述する。もう一つは、「墳墓の形式をした時計の計画案」である。後者は、議会弁護士であり、美徳の完全な友のサン=タルフォンス(Saint-Alphonse des Amis Parfaits de la Vertu)会の活動的な会員であったフリーメーソン、ニコラ=フランソワ・デュテール伯爵(Comte Nicolas-François Dutheil)からの委託を受けて制作された[30]。彼はこの頃にパエストゥムの神殿とコルトーナ(Cortona)周辺のエトルリアの遺跡を訪問し、この計画案では早くもパエストゥムの神殿のドリス式オーダーが採用された。1786年には「モンテ・カヴォの御受難会修道士の修道院(Ermitage pour les passionistes de Monte Cavo)」(計画案)を作成しアカデミーに送付した。こうし

た、パエストゥムの神殿とエトルリアの遺跡に見られる、ローマ帝政期以前の古代に対するヴォードワイエの知的探求はラブルーストへと継承され、後にラブルーストが1828年のローマ留学4年目に行った「パエストゥム神殿の復元研究」へと繋がったことが窺える。

2. メゾン・ダン・コスモポリート

アントワーヌ・ヴォードワイエの著名な作品としては、前述の「メゾン・ダン・コスモポリート」が挙げられ、今日も様々な論考で取り上げられる[31]。ローマ留学中に制作されたこと以外、その依頼主や経緯は知られていない。この作品の模写はローマからロンドン、フランクフルト、ベルリン、サンクト・ペテルブルグへと、ヨーロッパの様々な都市へ持ち帰られた[32]。オリジナルドローイングは長い間、特定できず、1780年代にはローマのフランス・アカデミーの奨学生の周囲には多くの外国人の愛好家や収集家がいて、彼らの作品を収集していたとされる。コスモポリートは「国際人」や「世界主義者」として訳されるが、接頭辞のコスモは「宇宙」の意味を持ち、ヴォードワイエの制作主題は宇宙を象徴している。また、世界主義的な国際性と自然科学の合理性が興隆した18世紀の啓蒙主義の社会背景を考慮に入れると「宇宙」と「世界主義」の二重の意味を与えることを意図したとも解釈できる。

二重に円形状に配列された列柱によって球体を支える構成のこの作品では、円柱はマルケルス劇場に見られる柱礎なしの原ドリス式のオーダーが使用され、その上のエンタブレチュアには黄道12宮が刻まれている。また球体には天空を象徴する星がちりばめられ、宇宙的建築論を具体化している[33]。球体の完全性が外観にも及んでいる点に特徴が見出される。この建物の内部には、中心に螺旋階段、その周囲に居室が配されて、球体表面の星が窓の役割を果たしている。ここでは球体を大空間として扱わずに再分割し、ヒューマンスケールな住居として構成されていることに特徴があり、「物柔らかな感じをもった計画案」と評されている[34]。ルドゥーが「農地管理人の家(Maison des gardes agricoles)」にて管理人が居住するための家を作ろうとした試みと同様に、この計画案も球体のロージュと呼ばれる宿泊所を作る試みであった。ブーレの壮大な半球体の記念堂に端を発する球体の建築が、ここでは人間的な尺度へと展開しているのである。円形状に配列された列柱によって球体を支え、ドームとそこに設けられた小さな穿孔によって星と天空を象徴するこの構成は、ジャン=ジャック・ルクー(Jean-Jacques Lequeu、1757-1825)が「大地の神殿(Temple de la terre, 1790)」や「平等への神殿(Temple à l'Égalité, 1793-1794)」にてその理念を共有しており、そこには明白な相同性が見出される[35]。このようにヴォードワイエは、ブーレに代表される18世紀フランスの革命期の建築の流れを汲む、「理性の時代の建築」を代表する建築家の一人であり、後にはルクーのようにメゾン・ダン・コスモポリートと表現を共にする建築家も現れたのである。

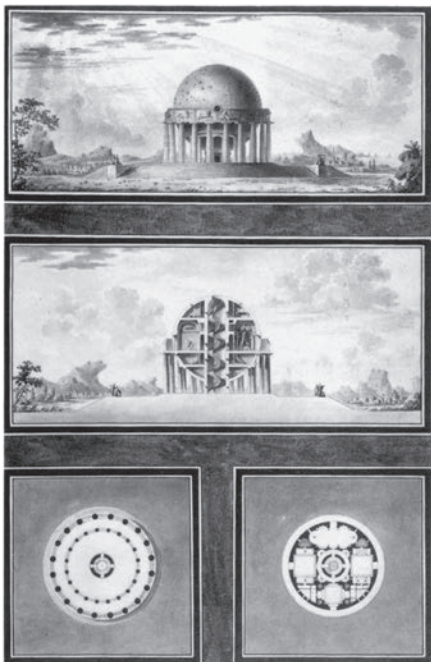


図5 ヴォードワイエ、メゾン・ダン・コスモポリート、1784年頃

3. アントワーヌ・ヴォードワイエとボザール創設との関わり

アントワーヌ・ヴォードワイエはフランス革命の混乱期にローマ留学から帰国し、1789年には建築の自由アトリエを開設して教育活動を開始した。1789年に勃発したフランス革命を契機に革命に共鳴した若い芸術家たちは旧体制のアカデミーに対抗して芸術コミューンを形成し、これにより1793年に王立アカデミーは廃止された。建築部門はジュリアン=ダヴィッド・ルロワ(Julien-David Leroy, 1724あるいは1728-1803)がアカデミーから独立したコミューンとして主宰することにより後世に継承された[36]。ルロワは建築理論講義の教授をつとめ、『ギリシアの最も美しい記念碑の廃墟(*Les ruines des plus beaux monuments de la Grèce*)』(1758)の著作で知られる。

1793年にヴォードワイエはルロワと共にルーヴル内のルロワの公邸の中に一時的な私的教育機関として建築学校(École d'Architecture)を設立し、教育活動に尽力した。この建築学校は恐怖政治が終わる頃、1795年に内務省によって公認された。ナポレオンの統領政府下である1800年頃に彼らはこの学校を、国立建築学校(École nationale d'Architecture)として国立の機関へ移行する計画を立案した[37]。1803年にルロワは死去

し、その後はヴォードワイエがその責務を果たした。これが後の王立エコール・デ・ボザールの前身となる。ヴォードワイエは1802年にキャトル・ナシヨン宮殿（Palais des Quatre Nations、後のフランス学士院、Institut de France）[38]におけるボザール宮殿（Palais des Beaux-Arts）、すなわちエコール・デ・ボザール新校舎の建築家に任命された。上記のようにヴォードワイエはルロワと共に革命期にエコール・デ・ボザールの礎を築いた中心的な人物の一人であった。

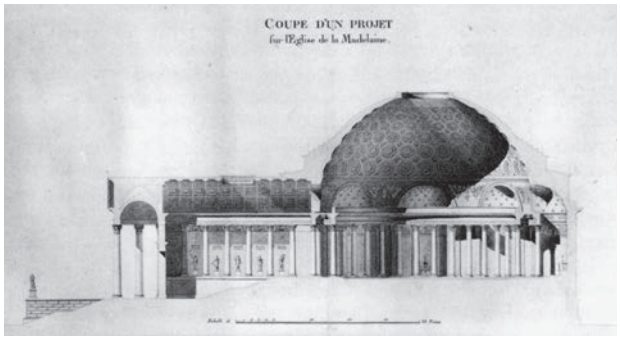
4. パリのパンテオンと「栄光の寺院」

ヴォードワイエは1791年にサント=ジュヌヴィエーヴ聖堂を国立の霊廟パンテオンへと変換する計画に対して抗議を行っている。この計画はオノレ・ミラボー（Honoré Mirabeau, 1749-1791）の死去を契機に計画され、ミラボーをパンテオンの最初の埋葬者とする意図を持っていた。ヴォードワイエは、旧体制下においてカトリックの聖堂として建設されたサント=ジュヌヴィエーヴ聖堂は、汎神論を旨とする「偉大な人物のパンテオン（Panthéon des grands hommes）」には不適切であるとして抗議を行った。既存の建物の単なる名称の変更ではなく、当時、荒涼とした野原であったシャンゼリゼを計画地とし、自由と啓蒙性を象徴する完全性を有した崇高な建築を新たに建設するべきであると主張した[39]。

実施されたこの変換に際しては、建築アカデミーの終身書記であるカトルメール・ド・カンシー（Quatremère de Quincy[40], 1755-1849）の主導による大規模な改修が行われた。以前からスフロの設計に批判的であった彼はこの時に、当時問題視されていた構造とは関係のない意匠上の改修を行った。スフロの考案であった東端部にあったゴシック様式の二つの鐘楼を取壊し、ドームの頂塔を撤去した。加えて、「古代の真の手法に倣い、全ての光が上方から降ってくるように」という理由により壁面の窓を改造し、42箇所設けられていた窓のうち38箇所の窓を塞いだ。この改修によりスフロが意図した著名な概念である「ゴシック建築の軽やかさとギリシア建築の壮麗さの融合」、並びに、「光の溢れる空間」は失われ、スフロの本来の意図と創造性は大きく歪められた。カトルメール・ド・カンシーによるこの改修は後に「スフロの設計案に悲惨なまでに介入した大胆さ」や「干渉」としてしばしば強く非難される[41]。ヴォードワイエは1798年にパンテオンのドームの支柱に関する独自の修復計画案を作成し、この計画案は1803年の『美術館年報（*Annales du musée*）』に掲載された。

一方、ヴォードワイエは1806年から1807年にかけて、ナポレオンの政権下で行われたマドレーヌ寺院（La Madeleine）を「栄光の寺院（Temple de la Gloire）」として完成させるためのコンクールに参加した。この建造物の建設は、度重なる戦争による戦没者の追悼を目的とし、共和主義の理想と愛国心の高揚が背景にあった。ここではヴォードワイエは前述の「偉大な人物のパンテオン」で求めた崇高なる完全性の具現化を志した[42]。ギリシア神殿の平面を前室とし、ローマのパンテオンを模範とした大きな半球体のドームを主室とする計画であり、半球体のドームをスフロのサント・ジュヌヴィエーヴ聖堂や彼のメゾン・ダン・コスモポリートと同様にコロナードで支持する構成である。ここではヴォードワイエは構造に配慮し、二重のコロナードの背後に堅固な壁面を配した。

図6　新サント=ジュヌヴィエーヴ聖堂の後陣の南東、サント=ジュヌヴィエーヴ修道院庭園からの眺め、1790年の版画。撤去される以前のゴシックの鐘楼、頂塔、開口部が描かれている



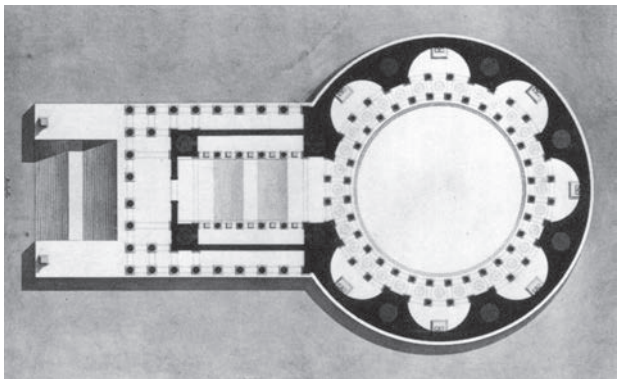


図7、図8　ヴォードワイエ、「栄光の寺院」、マドレーヌ寺院のコンクール計画案、断面図、平面図、1802年

この計画案は、各時代の建築家が理想としたローマのパンテオンの半球体の大空間の再現であると同時に、理性の時代の建築家達が描いた純粋な半球体の大空間の実現でもあり、彼の初期の傑作であるメゾン・ダン・コスモポリートを具現化するものであった。彼はこれをもって新しい宗教観を戴く霊廟を「栄光の寺院」とし、理想であるその完全性を表そうとした。このコンクールではアレクサンドル・ヴィニョン（Alexandre Vignon, 1763-1828）が優勝し、ギリシア神殿を忠実に再現した現在の建物はしばしば凡庸であると評される。

パリのパンテオンの変換計画に対するヴォードワイエの意見表明と「栄光の寺院」の計画案には、前衛に対する確固たる信念とその実現への意志を貫いた建築家としての彼の生き方が見える。ヴォードワイエは大規模な実施設計の機会には恵まれなかったが、彼の計画案と論考を通じて、18世紀の革命期の建築の潮流を後世のロマン主義の建築家達に伝え、啓蒙と自由の精神の追求を伝授したように思われる。加えて、理性的な前衛を貫くヴォードワイエと、厳格な古典主義を旨とするカトルメール・ド・カンシーとの間での対立の構図が18世紀末から既に見られ、そこには後のパエストゥム論争におけるラブルーストとカトルメール・ド・カンシーとの激論の火種が窺えるのである。カトルメール・ド・カンシーは王立の学校としてボザールが再開された時に建築アカデミーの終身書記となり、1816年から1839年までその地位を拠り所として絶対的な権限を振るった。厳格な古典主義者であるカトルメール・ド・カンシーは、1828年にラブルーストが行ったパエストゥム神殿の復元研究に対して激怒し、激しい論争へと発展した。以後、ラブルーストは彼を始めとする規範の遵守を旨とする一部の指導者達から冷遇される。

5. ヴォードワイエのその他の活動

これまで述べてきたものの他に、ヴォードワイエの活動として以下のものが挙げられる。彼は1810年にフランス記念建造物博物館（Musée des Monuments français）の建築家に任命され、また1811年には前述のようにボザール宮殿の計画案を設計する。これら施設は主に旧プティ・ゾーギュスタン（Petits-Augustins）修道院、現エコール・デ・ボザールの敷地に計画されたものである。前者は考古学者アレクサンドル・ルノワール（Alexandre Lenoir, 1761-1839）の主導により設立された博物館であり、革命により接収された修道院や教会の財産を収蔵し公開した。王政復古により閉鎖された同博物館の跡地にエコール・デ・ボザールの校舎であるボザール宮殿が計画された。ヴォードワイエはその設計を担っていたが、実施設計はフランソワ・ドゥブレ（François Debret, 1777-1850）が行った[43]。この計画は後にドゥブレの弟子フェリックス・デュバンへと受け継がれた。デュバンはラブルーストとローマ留学時代からの生涯の友人であり、ラブルーストと共にロマン主義の中心的な建築家である。

ヴォードワイエは1811年から1824年にかけてはカルムの市場（marché des Carmes）、モベール広場（place Maubert）の建築家となり、現在、彼による彫像が残されている[44]。前後の両面に顔を有する双面神であるヤヌスの彫像であり、二つの頭部が一つの柱身に対立的でありながらも共存している様相は魔術的であり、両義性またはその融合を暗喩しているかのようである。1813年にはロンドレ広場（place de Rondelet）に位置するサント=ジュヌヴィエーヴ図書館の建築家に任命され、これは後にラブルーストへと引き継がれる。社会的な地位としては、市民建造物評議会（Conseil des bâtiments civils）の評議員（1795-）、パリ科学・文学・芸術協会（Société des sciences, lettres et arts de Paris）の会員（1799-）となり、1805年にはキャトル・ナシヨン宮殿内に居住する栄誉を受ける[45]。更に芸術アカデミー（Académie des Beaux-Arts）の建築部門の古文書記録書記（secrétaire archiviste, 1807-）などを歴任し、1823年には芸術アカデミー会員に選出された。

第3章　イポリート・ルバ

1. ルバと前衛の建築

ラブルーストのもう一人の師匠であるイポリート・ルバは後述する2作品が代表作品であるが、それ以前に彼が設計補助として関わった建築作品には、革命期の建築の流れを汲む前衛性との接点が見られる。前述のように彼はアントワーヌ・ヴォードワイエの甥である。ルバは、ペルシエ、フォンテーヌ、ヴォードワイエに師事し、従ってラブルーストはペルシエ、フォンテーヌの孫弟子にもあたる。ルバは1806年のローマ大賞設計競技において2等を受賞し、2等でありながらその後に兵役を機会にローマ留学を果たした。

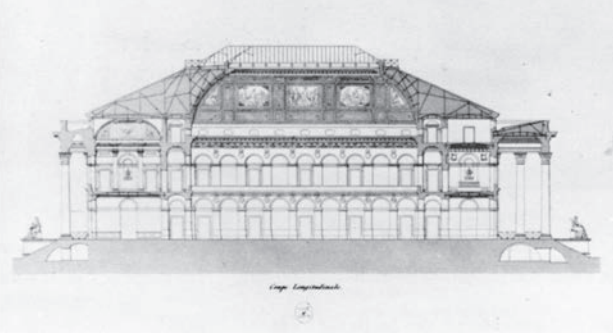


図9 ブロンニャールとラバール、パリ証券取引所の断面図、1807-1824年

帰国後、ルバはヴォードワイエと共にアトリエを運営し、同時にアレクサンドル=テオドール・ブロンニャール（Alexandre-Théodore Brongniart, 1739-1813）[46]とその弟子エロワ・ラバール（Éloi Labarre）が設計の任を担っていたパリ証券取引所（Bourse, 1807-1824）の設計補助を行った。ブロンニャールはエチエンヌ=ルイ・ブーレの直弟子であり、その潮流を継承する幻想的な前衛性を追求した建築家として知られる。パリ証券取引所はブロンニャールの設計により建設が開始されたが、工事の途中に彼が死去し、弟子であるラバールが完成に向けてその後の設計（1813-1824）を引き継ぎ、ルバはその設計補助を行った。一方、パリ証券取引所は非露出の鉄構造による大空間が実現されたことにおいてもその革新性がしばしば言及される。当時の図版には、ガラスの天窓から明るい光の差す中央ホールを始めとして、その上部にある主要な屋根架構が鉄構造で構成されていることが示されている[47]。パリ証券取引所の他にブロンニャールは、パエストゥムのドリス式オーダーを採用したカプチン会の修道院（Couvent des Capucines、現リセ・コンドルセ Lycée Condorcet, 1780-1782）や、ピラミッドの採用を試みたペール=ラシェーズ墓地（Cimetière du Père-Lachaise, 1803-）などの幻想的な作品を残した。彼は18世紀の前衛的な流れを汲む建築家であり、同時に鉄構造の先駆的建築家でもある。ブロンニャールとラブルーストには「パエストゥムのドリス式オーダー」と「鉄構造」の共通性が見られ、これはルバの設計補助を媒介にしていることが理解できる。

加えて、ルバはパリ証券取引所と同時期に、フォンテーヌの「贖罪の礼拝堂（Chapelle expiatoire, 1816-1824）」の設計補助を行っている[48]。「贖罪の礼拝堂」はフォンテーヌの作品の中では小規模ではあるが、彼が前衛性を実際の建築の中で実現したことで知られる。加えて、ルバは贖罪の礼拝堂のデッサンを残しているが、そこに描かれた礼拝堂背面の意匠はブロンニャールによるペール=ラシェーズ墓地の入り口の意匠と極めて類似している。フォンテーヌは一方ではペルシエと共に華麗で格調の高い古代趣味や、鋭敏な才気に溢れる表現によって第一帝政期に一つの潮流を築いた建築家として著名であるが、もう一方では前衛に挑戦する一面をも見せている[49]。

フォンテーヌの前衛への傾向は、彼の1785年のローマ大賞設計競技計画案、「ある大帝国の君主たちの為の埋葬の記念建造物（Monument sépulcral pour les souverains d'un grand empire）」に顕著に見られる。傑作と評されるこの計画案は「革命期の建築」を旨とする壮大な力作であり、同時に、フォンテーヌら若い世代に対するブーレの影響の大きさを示している。審査の結果に関して騒動が起こり、この審査はアカデミーが革命期の建築を疎んじた事件としてしばしば取り上げられる[50]。フォンテーヌと革命期の建築との関わりはクロード=ニコラ・ルドゥーにも遡り、彼はローマ留学からの帰国後にルドゥーの設計補助を行った[51]。当時ルドゥーは入市税徴税請負人の都市壁（Fermiers généraux）の関門（1785-1789）の設計を担い、50余りもの関門の設計と実施という膨大な仕事を抱えていた。関門の建設は革命後も続き、フォンテーヌはこの補助を行った。ルドゥーの関門も18世紀の革命期の建築を代表する作品であり、ここにもフォンテーヌと前衛性との関わりが見出せる。一方、フォンテーヌと鉄構造との関わりについては、ペルシエと共に設計したギャルリー・ドルレアン（Galerie d'Orléans, 1829）が挙げられ、パリで最も古い露出の鉄骨造の屋根架構の一つであった。

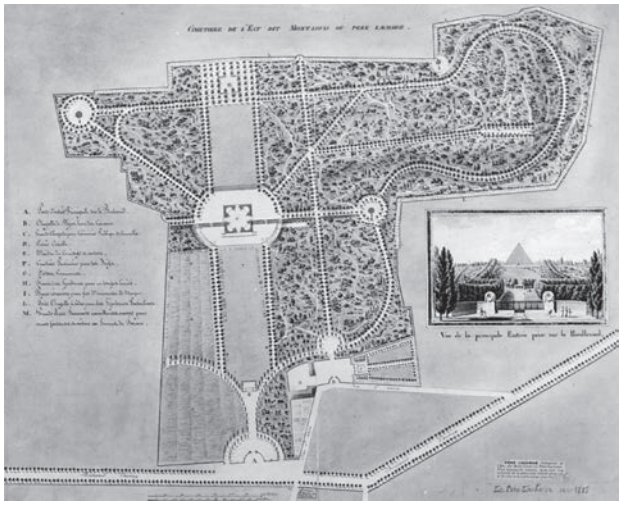


図10　ブロンニャール、ペール=ラシェーズ墓地、1803年頃

図11　フォンテーヌ、贖罪の礼拝堂、1816-1824年

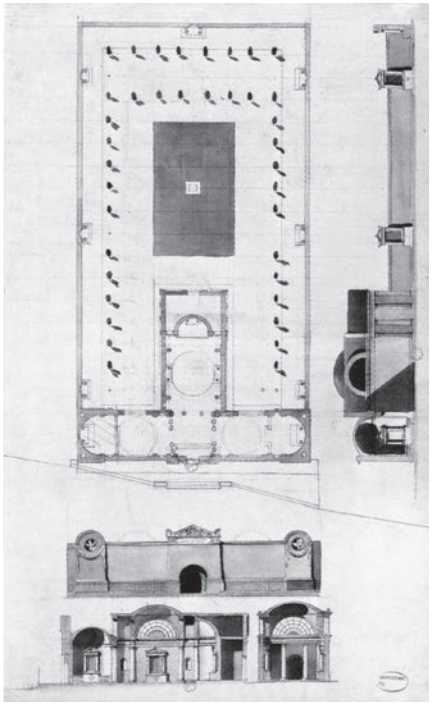


図12　ルバによる贖罪の礼拝堂の図面、1814年

図13　フォンテーヌ、埋葬の記念建造物、1785年

ローマからの帰国後、ルバは若い建築家として先達の建築家のもとで設計補助を担うことにより経験を積むが、彼の主な師匠であるヴォードワイエとフォンテーヌ、更にブロンニャールと、いずれも18世紀の前衛の流れを汲む建築家であり、ルバ自身が18世紀の前衛の潮流を直接的に継承する建築家であると理解できる。同時に、1820年前後のこの時期にはラブルーストがヴォードワイエとルバのアトリエにて両者に学んでいたことを考慮すると、弟子のラブルースト達はルバが設計補助を行ったこれらの作品を参考にしたことであろう。加えて、ルバが行っていた設計補助を通じてラブルーストは学生時代から鉄構造に近い位置にいたことが理解できる。

2. ノートル=ダム=ド=ロレット教会とローマの研究成果

ルバの代表作としてはノートル=ダム=ド=ロレット教会（Notre-Dame-de-Lorette, 1823-1836）とラ・プティト=ロケット監獄（Prison de la Petite-Roquette, 1826-36, 1974、取壊し）が挙げられる。ノートル=ダム=ド=ロレット教会は、1823年にカトルメール・ド・カンシーの主催によるコンクールが開催され、ルバが優勝した。この教会の建設は王政復古期において新しいカトリック教会の建築モデルを模索する目的を有し、中産階級の居住地区に計画された。主題の条件として、平面の構成はバシリカ型のプランを踏襲し、ローマのサン・パオロ・フォーリ・レ・ムーラ教会程度には豪華にしてもよいとされた[52]。実際には初期キリスト教時代の教会堂はフランスには見られず、馴染みのない建物が模範となっている。

ノートル=ダム=ド=ロレット教会の外観は、縦長のプロポーションの4基の華やかなコリント式の列柱をメインファサードとしている。室内ではイオニア式の列柱が配され、大勢の芸術家達による大きな壁画、バロック・ルネサンスの装飾芸術が施され、異なる様式の融合する豪華な内部空間となっている[53]。大理石の色彩によるポリクロミーを採用し、後陣には鮮やかな赤の彩色を配しており、華やかな色彩に特徴がある。内部は全体を通じてローマのサンタ・マリア・マッジョーレ教会（Santa Maria Maggiore）が模範となっている。ファサードのポルティコはカトルメール・ド・カンシーの厳格な教義の影響下にあるが、室内意匠においては異なっているとされる。平面の構成は、主題の条件に基づいて初期キリスト教時代のバシリカ式の形式を基調とし、それにパラディアンな平面を融合させた点に独創性が認められる[54]。この装飾の豊かな華麗な室内意匠は、ルバがペルシエ、フォンテーヌの流れを汲む建築家であると認識させ、同時にロマン主義の萌芽を予感させる。ラブルーストの両図書館の室内では壁画や色彩装飾、彫刻などの華麗な装飾芸術が見られ、彼は豊かに装飾を纏めることにおいても優れた能力を有していた。彼のこうした能力は、ルバの同教会の室内意匠を通じて、豊穣な装飾芸術を巧みに操作するペルシエ、フォンテーヌの流派に由来するように思われる。

鉄構造に関しては、ノートル=ダム=ド=ロレット教会では正面のポルティコの上部に非露出による弓形の鉄構造の梁が採用されている。この梁はコンクールの図面には描かれていないが、後の印刷物の図面ではそれが描かれている。後の図面ではポルティコの空間が広くなり、その為にスパンが長くなって、その上部に非露出の鉄構造の梁が採用されている[55]。この非露出の鉄構造の梁は他でも時折見受けられ、ルバが設計補助をしたブロンニャールとラバールのパリ証券取引所でも採用されていた。ルバはこの設計補助の際に弓形鉄構造のアーチに関する知識を得たと思われる。ラブルーストも弓形鉄構造のアーチをサント=ジュヌヴィエーヴ図書館の中で非露出にて採用している。

一方、ノートル=ダム=ド=ロレット教会に関しては、ルバはロー

図14、図15
ルバ、ノートル=ダム=ド=ロレット教会、外観と内観、1823-1836年

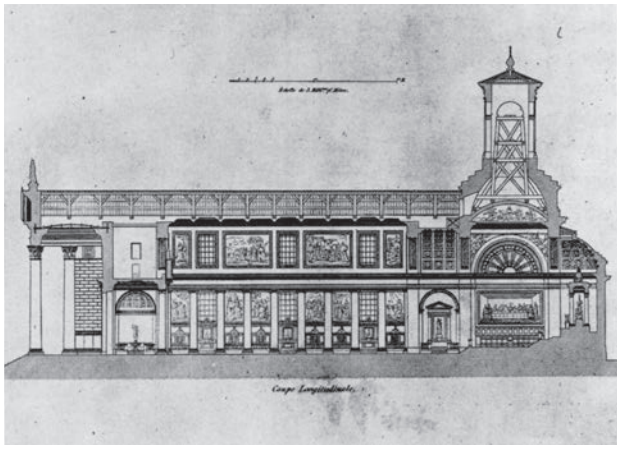


図16 『公共建造物選集』に掲載された
ノートル=ダム=ド=ロレット教会の断面図

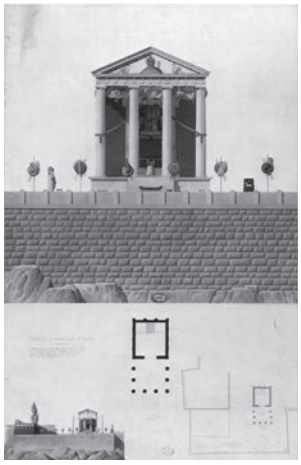


図17 ラブルースト、「アントニヌスとファウスティナ神殿」の復元研究、1825年
図18 ラブルースト、「パンテオンのポルティコの柱頭のオーダー」、1828年
図19 テオドール・ラブルースト、コラの「ヘラクレス神殿」の復元研究、1831年

マ留学生であったラブルースト兄弟と意匠資料を共有する関係にあったことも指摘できる。ルバの設計によるこの教会のファサードでは細長い比例のコリント式のオーダーが採用されたが、これはラブルーストがローマ留学の第1年目の研究成果として1826年にアカデミーに送付した「アントニヌスとファウスティナの神殿（Antonin et Faustine）」のオーダーに準拠したものであり、ラブルーストの研究成果が早くも実際の建築に採用された例としてしばしば言及される。同教会の設計の任にあったルバは、ラブルーストのアントニヌスとファウスティナの神殿の図面に大変興味を示した。これはノートル=ダム=ド=ロレット教会をはじめとして、当時必要とされた背の高い列柱のコリント式のオーダーに関する詳細な資料であり、後にこの種のオーダーの模範となった。兄テオドールはラブルーストに宛てた1827年5月の書簡の中で「アントニヌスとファウスティナの神殿のデッサンを、設計中の教会で同じオーダーを少し後に使うであろうルバ氏に貸し、彼は私に丁重に扱うと約束した[56]」と記している。加えて、4基のオーダーのポルティコは、イタリアのコラ（Cora）にあるドリス式の「ヘラクレス神殿」に準拠しており、これは、テオドール・ラブルーストが1831年に取り組んだローマ留学4年目の研究成果である。ノートル=ダム=ド=ロレット教会のポルティコの空間を広くする平面の構成はコラのヘラクレス神殿を模範としたと思われる。

奨学生の研究成果である一連の図面はアカデミーに送付され、慣例に従い公開されていた。このようにローマ奨学生の研究成果は、公開により広く建築家が共有する資料となり、実際に意匠として引用された。一方、ラブルーストはボザール時代にノートル=ダム=ド=ロレット教会に関わるデッサンを残しており、この教会の計画案に対する興味の高さを示している。このデッサンはコンクールに参加した建築家による様々な計画案を含んでおり、ローマ大賞に挑戦していたラブルーストはこれらを十分に参考にしていた様子が窺える。

3. ラ・プティト=ロケット監獄

ラ・プティト=ロケット監獄は、1825年にパリのラ・ロケットの敷地にモデル監獄を設計するための設計競技が行われ、これもルバが優勝した。中世の城塞のような外観による正六角形の幾何学

図20　ルバ、ラ・プティト・ロケット監獄、1825年頃

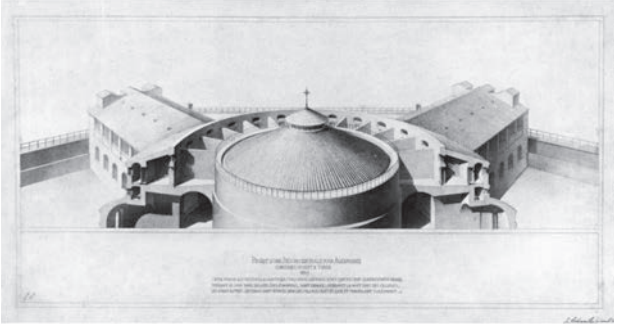


図21　ラブルースト、アレキサンドリアの監獄、1839-1840年

を基本とする構成であり、端部に六本の塔が、中央には礼拝堂が配置されている[57]。この監獄はジェレミー・ベンサム（Jeremy Bentham、1748-1832、イギリスの法学者）によって1791年に提唱されたパノプティコンのシステムが導入されたものとして[58]、同時にフランスで最初の独房によるシステムが実現した建物として著名であり、後に監獄建築の雛形となった。サン=シモン（Claude Henri de Rouvroy, comte de Saint-Simon, 1760-1825）、シャルル・フーリエ（François Marie Charles Fourier, 1772-1837）を始めとする当時の知識人が抱いていた人道主義的な理想を早期に具現化し、近代社会を背景に誕生した合理主義の建築として論じられる。ラブルーストによるアレクサンドリアの監獄（Prison d'Alexandrie, 1839-40）[59]の計画案でも、ルバによるラ・プティト=ロケット監獄と同様にパノプティコンのシステムが採用されている。

一般的に、ルバの作品は一方では古代と古典主義の傾向という観点から、もう一方では合理主義という観点から論じられる。これらは上記の二作品にも示されており、前者はノートル=ダム=ド=ロレット教会に見られる様々な装飾芸術を華麗に纏めたこと、後者は近代社会の展開の中で新たに必要とされた施設である監獄を、パノプティコンのシステムを採用し幾何学の原理を用いて実際の監獄として実現したことに表れている。

4. ボザールの理論講義とルバの歴史観

イポリート・ルバは1820年代には前述のように華やかな設計活動を展開するが、その後はボザールでの建築史教育に尽力し、実施設計活動に携わる機会は減っていく。彼は1840年から1863年にかけてエコール・デ・ボザールで建築史講義を行い、それぞれの世代の建築家達に歴史的観点を教授した。王立ボザール設立時から建築史講義を教授したジャン=ニコラ・ユイヨ（Jean-Nicolas Huyot, 1780-1840）の死去に伴いこの講義教授の選考が行われ、ルバが選出された。1819年以前のアカデミー付属建築学校では前述のジュリアン=ダヴィッド・ルロワが建築理論講義を行い、その中に建築史が含まれていた。ルロワの死去の後に彼の弟子であるレオン・デュフルニーが受け継ぎ、彼も王立ボザールの創設時に死去した。1819年の王立エコール・デ・ボザールの設立の際に、カトルメール・ド・カンシーの提言により、この講義は建築理論と建築史の二つに分かれ、建築理論はルイ=ピエール・バルタール（Louis-Pierre Baltard, 1764-1846）が、建築史はジャン=ニコラ・ユイヨがその講義を担った[60]。

ユイヨは小アジア、エジプト、ギリシアで調査研究を行い、東方建築に造詣の深い博識の人物として知られる。彼がエジプトで収集した碑文はジャン=フランソワ・シャンポリオン（Jean-François Champollion, 1790-1832）に届けられ、ヒエログリフの解読に貢献した。エジプトを起源とする東方の建築に対する知的門戸を開いた彼の歴史観は想像力豊かであったと評される[61]。ルイ=ピエール・バルタールはボザールの建築理論の教授に就任して以来、1846年の死去に至るまで建築理論の講義を担い、この分野において指導的役割を果たした[62]。バルタールは狭義の古典の規範とその普遍性を重んじ、それを遵守することを建築家達に求めた。終生、ロマン主義の建築に否定的であったとされる彼の理論講義では、「放縦の芽を伴うがゆえに、…一時的な気紛れや奇抜さに置き代えてしまう」、「形式に捕われない自由な遣り方、…ロマン主義的なという言葉は建築に相応しいものではない」、「ギリシアの建築とパエストゥムの神殿の誤った模倣の数々、…あり余るほどの逸脱」[63]と明言され、ロマン主義に見られる広義の古代建築からの意匠引用は明確に否定されている。ラブルーストがボザールで学んでいた頃は、啓蒙的寛容性を有するユイヨの建築史講義と、厳格な規範の遵守を説くバルタールによる建築理論講義が行われ、両者は相反する方向性を示していた。

1840年から行われたルバの建築史講義は、一方ではヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン（Johann Joachim Winckelmann, 1717-1768）とカトルメール・ド・カンシーが論じたギリシア建築の完全性や、盛期ローマの建築、初期ルネサンスに代表される古典の普遍

性などの、建築についてフランスに見られる伝統的な歴史観を主軸とし、もう一方では前任者であるユイヨとも共通する東方の建築を含む広義の歴史観を継承しながら、古代エジプト、バビロニア、インド、中国などの建築、ビザンチンや中世初期といった各時代の様々な国の建築を含む建築史を論じたところに、その特徴が見出される[64]。ルバの講義は理性的または中道的であると評されるが、それは伝統的なフランス建築の歴史観を尊重しつつ、同時代に研究調査された異文化の建築に対する学問的探究心の門戸を開き、両者の調和を保とうとする態度が窺えるからである。このように、ルバは、前述の二作品に見られるように「教会の華麗な装飾」と「監獄の合理性」といった異なる傾向と意義を持つ建築を実現するとともに、その後は建築史家として歩んでおり、異なる能力を必要とする様々な分野で活躍した、器用さと力量を兼ね備えた人物像を見出すことができる。

おわりに

一般的にアンリ・ラブルーストは、記念碑的な公共建築である二つの図書館において「露出の鉄構造」を早期に具現化したという視点から「革新性」が論じられる。加えて、彼はボザールにてアカデミックな教育を受け、最高の栄誉であるローマ大賞を受賞し、ローマのフランス・アカデミーの奨学生として特権的恩恵を受けることに象徴される、エコール・デ・ボザールの栄光の「王道」を歩んできた人物とされる。しかしながら、彼の師匠であるヴォードワイエやルバの作品や活動には、後のラブルーストの思想的な革新性や意匠上の創造性に繋がる要素が見られ、これらもボザールの中で育まれたものである。

ラブルーストの広い意味での革新性の思考の源流は改革期にあったコレージュ・サント=バルブに遡ることができ、それは「科学と芸術に対する見識の高い主題」という言葉に集約される啓蒙主義の恩恵である。ここには、中央建築家協会のメダルの図像に象徴的に示される、彼の主要な建築思想である「科学と芸術」、「正確性と自由」との共通性が見出せるのである。加えて、彼の第一の師であるヴォードワイエの代表作品、メゾン・ダン・コスモポリートや栄光の寺院と、理想主義的な完全性を求めた建築理念からは、18世紀の前衛である「革命期の建築」の潮流が見られ、これらを考慮するとラブルーストが「革命期の建築」の潮流を正統に継承する位置にいたことが明らかである。18世紀の革新性の継承がラブルーストを真価の遡及や事実の追求へと導き、ローマ大賞受賞案である1824年の「最高裁判所」や「パエストゥム神殿の復元研究」に帰結したと考えられるのである。

彼の第二の師であるルバに関しても、当時ルバが設計補助を行ったフォンテーヌやブロンニャールが「革命期の建築」に奉じた前衛的な建築家であったことから、ラブルーストがルバを通じて18世紀の革新性を継承する環境下にあったことが明らかになった。加えて、本稿で取り上げた18世紀の革新性を代表する建築家たちは、ラブルーストの特徴であるパエストゥムの神殿に代表される「原ドリス式オーダー」と「鉄構造」の双方との関わりを持っており、両者の符号は大変示唆的である。さらに、ルバのノートル=ダム=ド=ロレット教会にも見られ、ペルシエ、フォンテーヌの流派の特徴をなす、意匠引用に寛容な華麗な室内装飾と鉄構造の採用は、その精神が後のラブルーストの両図書館建築の閲覧室内部へと継承されたように思われる。

本稿で論じてきた諸点を考慮に入れるならば、ラブルーストには技術的な側面に加えて、理念的な側面においても「革新性」が見出せることが明らかであり、それは革命の精神と啓蒙主義の思想を建築に具現化することを試みた18世紀後半の「革命期の建築」から継承したものである。ラブルーストの真価の一つとして、伝統的なアカデミックな環境における古典的な基礎の上に革命期の建築の潮流を重ね合わせ、狭義の「規範」を超越する理念的探究を行いながら、新たな「革新性」を展開しようと試みたことが挙げられるのである。

注

1 ---Bailly, Antoine-Nicolas, *Notice sur M. Henri Labrouste*, Institut de France, Académie des Beaux-Arts, séance du 16 décembre 1876, Firmin-Didot, Paris. ---Delaborde, Henri, *Notice sur la vie et les ouvrages de M. Henri Labrouste*, Institut de France, Académie des Beaux-Arts, séance publique annuelle du 19 octobre 1878, Firmin-Didot, Paris. ---Millet, Eugène, *Henri Labrouste, sa vie, ses œuvres (1801-1875), notice biographique*, extrait du *Bulletin de la Société centrale des architectes*, C. Marpon et Flammarion, Paris, 1879-80. ---Coll., *Souvenirs d'Henri Labrouste : Notes recueillies et classées par ses enfants*, Cuënot, Fontainebleau, 1928. アントワーヌ=ニコラ・バイィ(1810-1892)は建築家、芸術アカデミー会員(ラブルーストの死去に伴う後任として1875年に選出)、中央建築家協会会長、芸術アカデミー会長を歴任。アンリ・ドラボルド(1811-1899)は芸術アカデミー終身書記。ウジェーヌ・ミレ(1819-1879)はアンリ・ラブルーストの直弟子、建築家、歴史的建造物事業総監督官、中央建築家協会古文書管理官。

2 ---Saddy, Pierre, *Henri Labrouste, architecte, 1801-1875*, Caisse nationale des monuments historiques et des sites, Paris, 1976. ---Levine, Neil, "The romantic idea of

architectural legibility: Henri Labrouste and the Neo-Grec", Drexler, Arthur(ed.), *The Architecture of the Ecole des Beaux-Arts*, The Museum of Modern Art, New York, 1977, pp.325-416. ---Levine, Neil, "The competition for the Grand Prix in 1824: a case study in architectural education at the Ecole des Beaux-Arts", Middleton, Robin(ed.), *The Beaux-Arts and Nineteenth-Century French Architecture*, Thames and Hudson, London, 1982, pp.66-123. ---Levine, Neil, "The book and the building: Hugo's theory of architecture and Labrouste's Bibliothèque Ste-Geneviève", ibid., pp.138-173. ---Van Zanten, David, *Designing Paris: The Architecture of Duban, Labrouste, Duc and Vaudoyer*, MIT Press, Cambridge, Massachusetts and London, 1987.

[3] ---Dubbini, Renzo(cura), *Henri Labrouste 1801-1875*, Electa, Milano, 2002. ---Leniaud, Jean-Michel(dir.), *Des palais pour les livres, Labrouste, Sainte-Geneviève et les bibliothèques*, Maisonneuve & Larose, Paris, 2002.

[4] Coll., *Labrouste Bibliothèque nationale : Labrouste, architecte de Bibliothèque nationale de 1854 à 1875*, Bibliothèque nationale, catalogue de l'exposition, Paris, 1953, no.134-135.

[5] フランソワ=アレクサンドル・ラブルーストの生没年に関しては、Millet(1879-80), p.4; Bailly(1876), p.4では-1835年、Vallery-Radot, "Henri Labrouste ", *Labrouste Bibliothèque nationale*(1953), non pageでは1761-1835年、*Macmillan Encyclopedia of Architects*, vol. 18, p.580では1762-1836年、Dubbini(cura)(2002), p.284では1762-1835年とされている。

[6] *Labrouste*(1928), p.9; Millet(1879-80), p.4; Bailly (1876), p.4; Vallery- Radot(1953).

[7] ibid.

[8] コレージュ・サント=バルブに関しては主にQuicherat, Jules Étienne Joseph, *Histoire de Sainte-Barbe, collège, communauté, institution*, tome I, 1860 ; tome II, 1862 ; tome III, 1864, Hachette et Cie, Paris を参照。

[9] Millet(1879-80), p.4.

[10] Vallery-Radot (1953).

[11] Levine, "The competition"(1982), p.82.

[12] *Le génie civil*, tome V, no.18, 30 août 1884, pp.290-295.

[13] プリタネ・フランセは後のリセ・ルイ=ル=グラン(Lycée Louis-le-Grand)であり、ボナパルト統領期にはプリタネ・フランセと呼ばれた。リセ・ルイ=ル=グランは15世紀のイエズス会が創設した学寮、コレージュ・ド・クレルモン(Collège de Clermont)を起源に持ち、その名称は時代によりコレージュ・ルイ=ル=グラン(Collège Louis-le-Grand, 1682)、平等のコレージュ(Collège Égalité, 1793)、中央奨学生学院(Institut central des boursiers, 1797)、プリタネ・フランセ(Prytanée français, 1798-1803)と変更された。プリタネとは古代ギリシアにおいては都市国家の公共施設プリュタネイオンを指し、プリュタネイオンは高等行政官、元老院議員であるプリュタニの集会施設を指す。ナポレオンの統領期、帝政期にはしばしばこのように古代の呼称が使用された。

[14] ヴィクトール・ド・ランノーに関してはQuicherat(1864), pp.4-13; Dorigny, Marcel, "Victor Lanneau, prêtre, Jacobin et fondateur du Collège des Sciences et des Arts(1758-1830)", *Annales historiques de la Révolution française*, no. 274, 1988, pp.347-365を参照。ランノーはテアト(Théatins)修道会の司祭として聖職の道を歩み、フランス中央部リムーザン(Limousin)地方のテュール(Tulle)のコレージュの学院長となるが、他方では、フランスのフリーメーソンの大きな勢力の一つであったグラン・トリアン・ド・フランス(Grand Orient de France)の支社であるサン・ジャン同志友愛会(Saint Jean de l'Intime Fraternité)の会派(ロージュ)に入会し、テュールにおける革命運動(1789-1791)では指導的役割を果たした。

[15] Dorigny(1988), pp.362-363. コレージュ・サント=バルブに見られる組織や建物の救済を目的とする買い上げとフリーメーソンとの関わりは18世紀半ばに同様な例があり、ソワソン館(l'Hôtel de Soissons)に建てられたカトリーヌ・ド・メディシス(Catherine de Médicis, 1519-1589)の大円柱(Colonne)が挙げられる。ソワソン館の土地建物が売却に出され、取壊しの危機にあった大円柱をルイ・プティ・ド・バショモン(Louis Petit de Bachaumont)が買い取り、1755年に彼は大円柱の再利用を条件としてこれをパリ市に無償で寄贈した。三宅理一、『エピキュリアンたちの首都』、學藝書林、1989、pp.99-112; Deming, Mark K., *La Halle au blé de Paris 1762-1813, <Cheval de Troie> de l'abondance dans la capitale des Lumières*, Archives d'architecture moderne, Bruxelles, 1984, pp.101-110.

[16] Labrouste, Henri, *Revue générale de l'architecture*, tome 8, 1849, p.151, Saddy(1976), p.6およびMillet(1879-80), p.20からの引用。

[17] *Labrouste Bibliothèque nationale*(1953), no.143.

[18] 現地調査(2005年3月)。

[19] Quicherat(1864), pp.50-52.

[20] *Labrouste*(1928), p.9.

[21] ibid., p.10.

[22] Coll., *Académie d'Architecture, Catalogue des collections, Volume I, 1750-1900*, Académie d'Architecture, Paris, 1987, p.152. 同所によれば、建築アカデミーが所蔵するアンリ・ラブルーストのデッサンのコレクション(Fonds Henri Labrouste)は、1976年のイヴォンヌ・ラブルースト夫人(Mme Yvonne Labrouste)による寄贈と、レオン・マルコット・ラブルー

スト氏（M. Léon Malcotte Labrouste）の委託に由来する。

[23] アントワーヌ・ヴォードワイエについてはBergdoll, Barry, *Léon Vaudoyer, Historicism in the Age of Industry*, The Architectural History Foundation, New York, MIT Press, Cambridge, Massachusetts and London, 1994を主に参照している。

[24] Delaborde（1878）, p.6; Millet（1879-80）, p.4.

[25] エコール・デ・ボザールの歴史に関する参考文献として、三宅理一、『ボザール：その栄光と歴史』、鹿島出版会、1982が挙げられる。

[26] 革命期の建築に関する主な参考文献として、---Coll., *Les architectes de la liberté, 1789-1799*, catalogue, École nationale supérieure des Beaux-Arts, Paris, 1989; ---Jacques, Annie, Jean-Pierre Mouilleseaux, *Les architectes de la liberté*, Gallimard, Paris, 1988が挙げられる。

[27] Bergdoll（1994）, p.11.

[28] ibid., p.25.

[29] テオドールのマルケルス劇場の研究は*Académie d'Architecture*（1987）, p.189によると1828年、2年目と記されているが、1828年が1年目、1829年が2年目である。

[30] Bergdoll（1994）, pp.29-32.

[31] Kaufmann, Emil, *Architecture in the Age of Reason. Baroque and Post-Baroque in England, Italy and France*, Harvard University Press, 1955＝エミール・カウフマン、『理性の時代の建築、―フランスにおけるバロックとバロック以後―』、白井秀和訳、中央公論美術出版社、1997, pp.146-147; Middleton, Robin, David Watkin, *Neoclassical and 19th Century Architecture 1*, Electa, Milano, 1980＝ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19世紀建築1』、土居義岳訳、本の友社、1998, pp.197-198; 三宅（1989）, pp.138-143; Bergdoll（1994）, pp.29-32.

[32] Bergdoll（1994）, p.284. フランクフルトの工芸美術館（Museum für Kunsthandwerk）に収蔵されているものがオリジナルドローイングとされ、その模写がベルリンの芸術図書館（Kunstbibliothek）、ロンドンのRIBA（英国王立建築家協会）、サンクト・ペテルブルグのエルミタージュ美術館に収蔵されている。

[33] 三宅（1989）, p.138.

[34] Kaufmann（1955）＝（1997）, pp.146-147.

[35] ibid.

[36] 三宅（1982）, p.50.

[37] Bergdoll（1994）, pp.35-38; Jacques, Annie, *Les Beaux-Arts, de l'Académie aux Quat'z'arts*, École nationale supérieure des Beaux-Arts, Paris, 2001, pp.8-10.

[38] フランス学士院の前身であるキャトル・ナシオンは、当時「碑文・文芸」、「科学」、「芸術」、「道徳・政治」の4部門によって構成され、建築は芸術部門に属した。

[39] "Idées d'un citoyen français sur le lieu destiné à la sépulture des hommes illustres de la France"（1791）, Bergdoll（1994）, p.33からの引用。

[40] カトルメール・ド・カンシーは通称であり、本名はアントワーヌ・クリゾストム・カトルメール（Antoine Chrysostome Quatremère）である。

[41] Kaufmann（1955）＝（1997）, pp.37-39; Coll., *Le Panthéon, Symbole des révolutions*, Centre canadien d'architecture, Caisse nationale des monuments historiques et des sites, Picard, Paris, 1989, pp.278-280.カトルメール・ド・カンシーが塞いだとされた窓については1985年の改修工事の際にその痕跡が確認された。

[42] *Le Panthéon*,（1989）, pp. 178-185; Bergdoll（1994）, pp.38-40.

[43] Jacques（2001）, p.10.

[44] Bergdoll（1994）, p.46.

[45] ibid., p.43.

[46] ブロンニャールに関しては主にColl., *Alexandre-Théodore Brongniart, 1739-1813, Architecture et décor*, catalogue, Musée Carnavalet, Paris, 1986を参照した。

[47] ibid., pp.120-177.

[48] Bergdoll（1994）, pp.45-46.

[49] ペルシエとフォンテーヌに関しては主にFouche, Maurice, *Percier et Fontaine : Biographie critique*, Librairie Renouard, Henri Laurens, Paris, 1904を参照した。

[50] フォンテーヌの計画案は、優勝したジャン＝シャルル＝アレクサンドル・モロー（Jean-Charles-Alexandre Moreau）の計画案に対して圧倒的な優秀性があったにもかかわらず、「優秀なドラフトマンに賞を与えることを危惧する」という奇妙な理由により入賞さえしなかった。これは、描写表現力は優れているが意匠には高い評価を与えられないといった意味である。この結果に対して学生達と幾人かの教授までもが異論を唱える騒動を起こし、最終的に2等入賞という結果になったことが記録に残されている。Fouche（1904）, p.15; Pérouse de Montclos, Jean-Marie, *"Les Prix de Rome", Concours de l'Académie royale d'architecture au XVIIIe siècle*, École nationale supérieure des Beaux-Arts, Paris, 1984, pp.193-195; Middleton（1980）, p.198.

[51] フォンテーヌは前述のようにローマ大賞受賞に至らなかったために私費によりローマに留学した。翌年からローマのフランス・アカデミーの奨学生となったペルシエと調査研究を始めとする留学生活全般に渉り活動を共にした。帰国後のフォンテーヌは革命の余波を受けて経済的に著しく困窮する。Fouche（1904）, p.27.

[52] Middleton, Robin, David Watkin, *Neoclassical and 19th Century Architecture 2*, Electa, Milano, 1977＝ロビン・ミドルトン、デイヴィッド・ワトキン、『新古典主義・19世紀建築2』、土居義岳訳、本の友社、2002, p.16.

[53] ibid.

[54] Loyer, François, *Histoire de l'architecture française, de la Révolution à nos jours*, Mengès, Paris, 1999, pp.71-72.

[55] Église Notre-Dame-de-Lorette, Coupes publiées dans Gourlier, *Choix d'édifices publics*, 1825-1850, Loyer（1999）, p.72からの引用。

[56] Saddy（1976）, p.14. 図18に示したラブルーストによるデッサンは、以前は「アントニヌスとファウスティナの神殿」の柱頭のオーダーとされていたが、近年では「パンテオンのポルティコの柱頭のオーダー」であるとされている。両者は著しく類似し、オーダーとしては同一視されてよい。

[57] Loyer（1999）, p.92.

[58] ibid.; Middleton（1977）, pp.22-24.

[59] アレクサンドリアの監獄は1840年に行われたコンクールであり、ラブルーストが優勝したが、実際には建設されなかった。Saddy（1976）, p.33.

[60] 三宅（1982）, p.50.

[61] Pinon, Pierre, "L'Orient de Jean-Nicolas Huyot. Le voyage en Asie-Mineure, en Égypte et en Grèce（1817-1821）", *Revue du monde musulman et de la Méditerranée*, vol, 73, 1994, pp.35-55.

[62] ルイ＝ピエール・バルタールに関する参考文献として、Pinon, Pierre, *Louis-Pierre et Victor Baltard*, Monum, Paris, 2005; Baltard, Louis-Pierre, *École royale des Beaux-Arts, Discours d'ouverture du cours de théorie de l'architecture*, Crapelet, Paris, 1835-36＝ルイ＝ピエール・バルタール、『ボザール建築理論講義』、白井秀和訳、中央公論美術出版、1992が挙げられる。

[63] Baltard（1835-36）＝（1992）, pp.5-6.

[64] Largier, Françoise, "Louis-Hippolyte Lebas（1782-1867）et l'histoire de l'art", *Livraisons d'histoire de l'architecture*, No. 9, 2005, pp.113-126.

図版出典

1）http//uploadwikimedia.org/wikipedia/commons/d/d6/Sainte-Barbe_vue_cavali% C3% A8re.jpg（最終アクセス11/08/18）. 2）*Académie d'Architecture*（1987）, p.309,（AA）. 3）ibid. p.152,（AA）. 4）Bergdoll（1994）, p.27,（coll. privée, Paris）. 5）ibid., p.29,（Vaudoyer coll., Paris）. 6）*Le Panthéon*（1989）, p.96,（gravure de Michel, 1790）. 7）, 8）Bergdoll（1994）, p. 39,（Vaudoyer coll., Paris）. 9）*Brongniart*（1986）, p.166,（gravure d'Émile Olivier, Musée Carnavalet）. 10）ibid., p.166,（Musée Carnavalet）. 11）Loyer(1999）, p.39,（Photothèque des Musées de la Ville de Paris). 12）Dubbini（cura）（2002）, p.33, (Bibliothèque de France）. 13）Montclos（1984）, p.194,（ENSBA）. 14）http://upload.wikimedia.org/wikipedia/commons/0/0e/NotreDameDeLoretteFacadeSud.JPG（最終アクセス11/08/29）. 15）http://lh5.ggpht.com/_ZunlmXG2fZY/SrEQ2vSR5VI/AAAAAAAAA7M/lmEaFZRnVt8/NDL % 20interieur.jpg（最終アクセス11/08/29）. 16）Loyer（1999）, p.73,（Gourlier, *Choix d'édifices publics*, 1825-1850）. 17）*Académie d'Architecture*（1987）, couverture,（AA）. 18）Dubbini（cura）（2002）, p.57,（AA）. 19） Drexler（ed.）（1977）, p.165,（ENSBA）. 20）Bergdoll（1994）, p. 47,（Musée d'Orsay）. 21）Dubbini（cura）（2002）, p.110,（AA）.

AA : Académie d'Architecture. BN : Bibliothèque nationale. ENSBA: École nationale supérieure des Beaux-Arts.